心に書かれた律法と文字で書かれた律法

２０１６年4月１７日
佐々木正明

多くの動物には本能があります。誰も教えていないのに、生まれながらに持っている様々な能力や知識です。よわよわしい小鳥や昆虫が、集団で何千キロメートルも危険な旅をして、間違いなく越冬地や繁殖地に到着するのも不思議です。小さな蝶がまだ幼虫の時には蟻の巣に運ばれ、蟻に餌をもらいながら蟻の好む甘い汁を出して共生しながら、蟻に食べられてしまう危険がある成虫になる一瞬は、上手に蟻から離れて羽化するところなど、その賢さに感心させられます。これ以外にも、多くの生物は、生存し続けるための驚くような知恵を蓄え、とても人間の及ぶところではありません。その本能がなかったら、彼らは一瞬たりとも生き延びることはできません。

この本能は、動物たちが生きて行くためには絶対に必要なものとして、それぞれに、神がお与えになったものです。万物の創造神を信じることが出来ない進化論の説明では、決して納得が行くものではありません。何世代にもわたっての経験から、特定の知識や知恵を修得することなどあり得ないと、昔から証明されているからです。

人間にも本能が与えられています。他の動物も持っている、動物的な本能とでも言うべきものもあります。たとえば生まれてすぐに、誰にも教えられなくても母親の乳首をさがし、それを口に含む哺乳動物の本能があります。乳の吸い方も、誰に倣う必要もありません。お腹がいっぱいになると眠ります。

高等動物になるほど、本能的な知識が少なくなり、後天的な習得による知識や能力が多くなります。狼もトラも、餌を確保する知恵と技術は、本能によってではなく、親に教えられなければなりません。最も高等な動物である人間には、生きて行くための基本的な本能はごくわずかで、必要な多くのことは、後天的な教育や経験で修得されて行きます。

神は人間をお造りになるとき、特別に、人間だけに、神に似た性質を与えてくださいました。それが人間の本能的部分の多くを形成して、人間を他の動物たちとは異なった生き物にしています。この人間に与えられた本能、他の動物には与えられていない能力、人間の人間たる基本的姿ともいうべきものが、パウロの言う「心に書かれている律法」です。（ロマ２：１４～１５）　文字で書かれたてイスラエル民族に与えられた律法、すなわち旧約聖書では

ない律法で、旧訳聖書を持たない人々にも与えられている律法です。これは人間が造られたときに与えられたもので、人間がどのように生きるべきか、理屈としてではなく本能によって示すものであり、イスラエル人に与えられた律法よりも、ずっと先に与えられたものです。

この心の律法には、人間が造り主である神を感じ、神を敬い、神と語らう祈りの気持ちが与えられています。それから、神に似たあらゆる良い性質が与えられています。愛、思いやり、情け、正義、平等、平和、聖さ、正直など、思いつくすべての良い性質が本能として与えられ、人間はこれらの本能を心の律法として駆使しながら、共に生きるべきでした。

それに対し、モーセを通してイスラエルに与えられた律法、すなわち文字で書かれた律法である旧約聖書は、罪のために滅びに陥った人間に、救いの道を示すために与えられたものです。罪を犯して神から離れ、悪魔の支配する世界で滅びの生活をし、やがては望みのない完全な滅びに陥らなければならない、過酷な宿命にある人間を神は憐れみ、救いの道を教えるためにお与えになったものです。心の律法は、人間が人間として人間らしく生きるための本能であって、神の美しい性質が写し与えられています。しかし、モーセを通して文字で書かれて与えられた律法は、滅びに陥った人間、悪魔に捕えられた人間を、悪魔から解放し、滅びから救い出すための、神の計画と実行が記されています。

文字で書かれた律法も心に書かれた律法も、同じ神から与えられたものであり、本質は同じです。しかし、目的が明らかに違うのです。モーセの律法は、神が人類を滅亡から救うために、その手段としてお選びになった、イスラエル民族に与えられたのです。彼らがより良く神を理解し、神の御心とご計画を知り、神がやがてお送りになる救い主を迎え入れるために、そして救い主がその救いの働きをやり遂げるために、ふさわしい民族となるための、教育の書物、指導の書物だからです。

くり返し神を裏切る堕落しきった民族を、神の器である民族に教導するために、旧訳聖書には、特殊な教えや特殊な取り扱いがたくさん書かれています。それは、同じ神がお与えになった心の律法とは、随分異なっているようにさえ思えます。普段は優しい父親が、悪いことをしてもそれを認めず、謝りもしない子供に対して、正しく教導するために非常に厳しく接するようなものです。父親が変わったのではなく、状況が変わったのです。

すべての異邦人は、モーセを通して与えられた、文字で記された律法こそ所持していませんが、生活のための律法である、心に書かれた律法は持っています。そしてこの心の律法の方が、文字で記された律法より先に与えられ、効力を発揮していました。モーセの律法さえ、この心の律法の選択にかかっていた、その判断にゆだねられていたのです。心の律法がなくては、モーセの律法さえ機能しないと言うことです。心に記された律法は人間が生きるべき

基本を教えるものであり、文字で書かれた律法は、罪のために滅びに陥った人間が、いかにして救いを得ることが出来るかと言うことを教えたもので、機能、目的が違うのです。

モーセの律法はしばしば、心の律法に訴えています。心の律法が機能していないのでは、モーセの律法も意味を持たないからです。心の律法の大切さについては、パウロも言及して語っています。「兄弟たち。すべての真実なこと、すべての誉れあること、すべての正しいこと、すべての清いこと、すべての愛すべきこと、すべての評判の良いこと、そのほか徳と呼ばれること、賞賛にあたいすることがあるならば、そのようなことに心を止めなさい」。（ピリピ４：８）パウロはイスラエル人以外の人々の間でも、さまざまな素晴らしい徳があることを認めて、それらを心にとめることを勧めました。

キリストの教えの特徴は、その天真爛漫さにあると言った人がいますが、そのキリストの天真爛漫な教えの元は、モーセの律法に根差すと言うよりは、人間性の奥底に根付かせられている原則的な律法によるもとのと言えます。「空の鳥を見なさい。野の花を見なさ」などは、その最たるものです。

私たちは心に記された律法と文字で記された律法の違い、目的と性質をはっきりと理解し、共に尊重しなければなりません。人間として人間らしく生きる原則は、本来モーセによる律法で学ぶべきではありません。モーセの律法の目的は、人類の救いです。しかしその中に、廃頽した人間の本性を矯正するような、補強の律法もふくまれているのです。モーセの律法でも最も大切な戒めとされている、神を愛し、他人を愛することなどは、まさにその例の一つです。イスラエル民族が、救い主を迎えるために、道徳的にも倫理的にもそれにふさわしい民族になるように、心に書かれた全人類に共通な律法が、改めて強調されたのです。

しかし一方では、堕落した人類の中からイスラエルと言う民族を選び、これを教育指導していく働きは、困難を極めました。そういう特殊状況の中で、ときには、心に記された律法に反することも、行われなければなりませんでした。他民族との結婚が禁じられ、戦争が正当化され、場合によっては殺人も許されています。これは本来の人間性に反すること、すなわち、心に記された律法に反することです。しかし実際問題として、堕落して罪に縛られた人間たちが、民族を造り、国家を建てて隣接して生きなければならない中では、避け得ないのが実情です。

問題はこのような特殊性を取り上げて、神は戦争を許している、殺人も許容していると言い出すことです。クリスチャンと言われる人たちの多くも、戦争や殺人は、本来許されるべきではないと考えていますが、実際は、神も許しておられるではないかと、自分たちの戦争や殺人を正当化しています。そして他宗教を迫害したり、弱い民族や国家を侵略したりしな

がら、植民地化を推し進め搾取と大量殺戮を続けていました。

そのような西欧のキリスト教の流れの中で、「それは違うのじゃないか、間違っているのではないか」と、考え始めるクリスチャンたちがいました。彼らは、聖書の中に、特にキリストの天真爛漫な教えの中にある、基本的な人間性を大切にする教え、いわゆる、ヒューマニスティックな部分、人道主義的な部分に共感しました。自分たちの中にある心に記された律法に共鳴することを見つけ出したのです。当然と言えば当然なのですが、それらのクリスチャンの多くは、聖書が誤りのない神の言葉であることに、疑問を挟む傾向にありました。旧約聖書の特殊性を理解しなかった彼らは、聖書さえ、心の律法で取捨選択されるべきだと感じたのです。

ところが、聖書は一点一画も誤りのない神の言葉だと信じる人々は、どちらかと言うと、心の律法、あるいはそこから派生する良心の叫びに耳を傾けるよりは、聖書の記述が神の言葉であり、その中にこそ、神の御心が明らかに示されていると考えました。すると、特定の状況の中では戦争も正当化され、殺人も許されることになってしまいます。そして悪いことに、その特定の状況を、自分たちに都合が良いように拡大して考えるようになって行くのです。古くは神の名によって行われた十字軍が良い例です。記憶にまだ新しいのは、神の名によって正当化されたベトナム戦争です。

日本人は文字で書かれた律法を持っていません。心に記された律法を持っているだけです。日本人もたくさんの戦（いくさ）をくり返してきました。その中には多くの我田引水、自分勝手、我欲、その他の悪が紛れ混んでいたのも事実です。しかし、四つの海を国境としていた日本は、他民族との戦争はあまり経験していないせいか、西欧キリスト教諸国のような、好戦的な民族、あるいは国家とはなりませんでした。彼らのような魂胆を持って他民族や国家を侵略し、その富を奪い、人種差別を前面に押し立てて、虐殺をほしいままにするようなことは、滅多に行っていないのです。秀吉による朝鮮侵略は、例外中の例外ですが、人種差別に基づく西欧の植民地化政策とは異なっていましたし、世界的に見ると、まさに失敗に終わった愚かな一過性の侵略に過ぎないように思えます。ただし秀吉の朝鮮侵略は、植民地主義のカトリック国、スペインの侵略に対する壮大な戦略の一環であったと理解すると、まったく違った絵が見えてきます。

例外と思われる中国への侵略さえも、西欧キリスト教諸国の植民地政策に、後れを取ってはならないと始めたもので、実際のところ、バスに乗り遅れたのであり、日本軍の残虐行為と責められているものも、ほとんどは軍として組織的に行ったものではなく、規律を外れた散発的なものであり、戦争にはありがちなことでした。戦後のマッカーサーの支配の下で、勝者による勝者のための偏向教育を受け、残虐非道な日本というイメージを植え付けられ

て来た私たちも、そろそろ真実に気づくべきときだと思います。私たちは、アメリカに都合が良い日本になるように、作り上げられた歴史を教えられてきたのです。

そのようなキリスト教国を嫌い、また恐れて、徳川幕府はキリスト教を弾圧し、外国との交渉を禁止しました。それから 250 年ほどもたって明治に入るときも、植民地政策の鼻息をますます荒くして、日本に接近してきた西欧キリスト教諸国を日本は嫌いました。嫌ったけれどもその力に抗しきれず、日本はついに国を開き、続いてこれも力に屈して信教の自由を認め、さらに続いてキリスト教の自由も認めました。ただ、日本の為政者たちは、流血や虐殺をいとわず武力で制覇する、西欧植民地主義の精神的支柱であるキリスト教だけは、何としても阻止しようと考えたのです。

そのためにやったことが、血なまぐさいキリスト教に代えて、日本の精神的支柱になり得ると判断した国家神道を取り入れることでした。キリスト教の布教は、列強の圧迫によって許さざるを得なかったけれど、なんとかキリスト教の侵入は阻止しようと試みたのです。国家神道を、仏教とキリスト教の上にある「宗教ではない宗教」として祀りこれに国体を守るための祭儀を執り行わせ、キリスト教の勢いを抑えながら富国強兵を勧め、西欧キリスト教列強国と肩を並べようとしたのです。

このころ、日本の指導者たちのキリスト教に対する思いには、相反するものがありました。一つは、西欧植民地主義国家の血塗られた宗教と言う好ましくない一面、もう一つは進んだ西欧諸国家の美しい精神文化という一面です。実際キリスト教の中にあった博愛、平等、教育、医療などについては、多くの有能な日本人たちが強い憧憬を寄せ、キリスト教を積極的に取り入れようとさえしました。

確かにキリスト教には、この二つの相反するものが共に強く混在しています。どちらもキリスト教なのです。そのキリスト教を、いま筆者が語っている、文字で書かれた律法と心で書かれた律法という視点で見ると、だいぶ見渡しが良くなると思います。旧約聖書、つまり文字で書かれた律法を強調し、これをイスラエル民族という特殊な民族の特異な必要性のために与えられたものと理解せずに、全人類に適用しようとすると、血なまぐさく好戦的な侵略者国家の宗教となり、心に記された文字によらない律法を強く意識して聖書を理解している人は、愛と、憐れみに満ち、平等を好み、平和を愛し、争いを憎むキリスト教徒になると言うことです。

すでに触れましたが、心に記された神の律法である、人間性を強く意識しているクリスチャンは、どうしても、聖書をそのまま神の言葉として受け入れることが出来ない、人道主義的傾向に陥ります。旧約聖書の教えが、自分の心の叫び、心の倫理と合わない、心の宗教と

合わないと感じて、聖書の記述や教えを神からのものとして、素直に受け取ることが出来ないのです。それは、いま筆者が論じている、文字で書かれた律法と心に記されている律法について、考えてもみなかったためでもあります。

このようなクリスチャンが、今、西欧ではどんどん増えて、結果として教会離れ、あるいは世俗化と言われる現象が、雪崩のように起こっていると言われています。そして、その人たちは容易に、世界中の良心的な人たち、あるいは自分の心の奥深くの要求、つまり神の姿の写しである麗しい本能の要求に敏感な人たちと心を繋ぎ、行動を共にすることが出来るようになっているのです。この世界中の良心的な人々は、決して、「心に記されている律法」という聖書の教えに気づいているわけではありません。ただ、自分の本能の欲求、あるいは人間性の要求に反応しているだけで、ヒューマニズムなのです。

この心の欲求、本能的な要求の強弱は異なりますが、無神論者にも、共産主義者にも、回教徒にも、仏教徒にも、神道を奉じる人にも、どんな宗教を奉じる人にも必ず存在します。ところが、これらの人々が自分の麗しい本能の声に従い、一致して美しいことをやり遂げることは非常に難しいと言うより、事実上不可能です。それは、人間は自分の本能的感覚あるいは声に従って行動するより、自分の良心に従うことが多いためです。

神に与えられた人間の本性は、裸のままで、あるいはそのままで表現されることはありません。必ず、文化と言う衣を着て、環境に育てられ、状況に影響されたものとして、具体的に姿を現すのです。たとえ本質的な性質は同じでも、それぞれの文化土壌で発芽し、形を現わすのです。それで、日本文化の中では日本的な良心が形成され、イタリヤではイタリヤ的な良心となります。キリスト教文化と言う中で生まれ育つと、キリスト教文化的な良心を抱き、回教徒の中で成長すると、回教徒としての良心をもって行動するようになります。そして環境に影響されたそれらの良心は、互いに異なった判断となり、異なった行動となり、互いに敵対することさえ少なくありません。

その異なった良心は、自分たちの良心の判断で、人間性が犠牲にされたと感じると怒り、不平等に扱われていると思うと憤るのです。その怒りや憤りの度合いや、それをどう表現するかもまた文化によって異なります。その怒りや憤りを受けた人たちの反応もまた、それぞれずいぶん異なります。何の憐れみも示さず、数百万人、数千万人の人々を滅ぼした植民地主義者にも良心があり、善悪の判断がありました。自国の拡大と繁栄を願って覇権主義を続けている人たちにも、いままさに、非人道的で残酷なことを当然のように行っているＩＳの人々にも、チベットやウイグルの人々を抑圧し続得ている中国の人々にも、彼らの良心と善悪の判断があるのです。泥棒を生業にしている家族の中に生まれた子供は、泥棒の良心と倫理を持ち、正義を尊び追求する警察官の家族の中で教育を受けた人は、また、それなりの良

心を持ちます。(パウロも、心に書かれた律法との関係で良心に言及していますが、残念ながら、理論は発展させられていません。)

ともあれ、人間としての基本的な善性と言うものは共通ですが、それが表現されるときは、かなり異なったものとして、時にはあい反するものとして出てくるために、人間はなかなか一つ思いになって協力したり、助け合ったりすることが出来ないのです。それにもかかわらず、宗教や哲学的信念、あるいは政治的な信念と言うものを取り除くと、より多くの共通概念が現れてきます。いわゆる原理主義とか根本主義とか言われる、極端な理念に囚われている人たちはその理念を大切にするあまり、人間としての本性を否定しがちなのです。自戒として言っておきますが、私たちアッセンブリーズ・オブ・ゴッドの交わりに属する者も、流れからいうと強い原理主義であり、たとえば、神の名を持って戦争に突き進むというような、極端な傾向を持っています。

半面、そのような理念を持ち合わせていない人々、あるいは薄い人たちは、案外容易に仲良くなり、協力しあうことも可能ですが、理念が弱いためにすぐに変化してしまったり、冷めてしまったりすることも多くなります。その上、神の姿に似せて造られているとはいえ、人間性は罪のために破壊され、ねじ曲げられ、弱体化しているために、良いことを大規模に遂行して行く力にはなり得ないのです。

私たち日本人クリスチャンは、自分たちの同胞が文字で書かれた律法を持っていなくても、心に記されている律法を持っていることを、しっかりと理解しましょう。彼らが自分の心の律法に、かなり一生懸命であり、知らないながらも、神に似せて造られた姿を素直に顕そうとしていることも、知りましょう。さらにその上に、日本人の宗教意識が、この心の律法にかなり忠実なものであることに気づくのが大切です。この点については次の文章に譲ります。